

2) 文章表現による分析 (表2)

4月の事例分析によると20分間に保育母がかかわった幼児は11名である。3歳児の受持ち人数は保育母1名に対して20名であることを考えると、受持ち全幼児に対する保育母の配慮は一応認められる。しかし、この相互関係はその内容が重要である。即ち幼児理解によって保育母と幼児の信頼関係が高まり、そして個々の幼児のために適切な環境が与えられ、直接的援助が可能になってくることを考える。

(表2)で見るように自由遊びに見られる保育母と個々の幼児の相互関係から保育上の注視内容を抽出して見ると(表3)のように相互関係総数とその注視内容総数の4月7月の比較では7月が注視内容が多い結果になっている。

ここで(表4)のように注視内容を4項目別に分類して具

(表2)

自由遊びに見られる保育母と個々の幼児の相互関係 (M・D使用による)				
幼児名	幼児の言動	関係	保育母の言動	保育上注視内容 (言動・その他)
			本児に対して	
A子	「毛虫毛虫いるいる」と伝える。	→	「わあー毛虫いるいるさわからないで」という。「やっつけようか」と言う。	幼児がもっている生きものに対する優しい気持ちを理解していない 毛虫だけでやっつけなくて優しくしてと叫ばせてしまったことは一時であつても幼児に不安を与えた。
	「やっつけたらいかんやっつけたらいかん」と叫ぶような声で保育母の行動を見ながら言う。	←	「どうして、刺されたらいたいよ」と取りのけようとする。	
	「先生やさしーに、やさしーに、死んだらいかん」と叫ぶ。	→	「そうね、優しくしようね」と声をおとして言う。	
	「優しくしたらいいい」	→	「毛虫さんあつちで遊びなさい」といいながら木のはにのせて持っていく。	
	「毛虫さんさよなら」	←	「毛虫さんはお家に帰るって」「よかったね」	
	「はいー、よかった」と嬉しそうに言う。	→		
T男	「わー毛虫ここにいるよ」と伝える。	→	「わー毛虫いるいるさわからないで」と注意するように言う。	先生は毛虫をやっつけるのではなにかという不安を与えた。
	毛虫をじっと見ている。	←	「やっつけようか」と言う。	
	「やっつけたらいかん」というA子の叫びを聞き保育母との会話を心配そうに見る。	→	「毛虫さんあつちで遊びなさい」	
	安心したようにここにこしながら見ている。	←		
B子	毛虫の様子をじっと見ている。心配そうに友達の様子を見ている。	←	「毛虫さんはお家に帰るって」「よかったね」	友達と先生の様子に不安を与えた
	「うん」とうなずく。	→		

保育上注視内容の項目別・月別集計表 (%) (表5)

月	幼児理解	信頼関係	環境構成	直接的援助
4	32.5	18.8	20.2	28.5
7	37.8	26.3	18.9	17.8

体例を考えてみることにした。次にはこれを(表5)のように注視内容の月別・項目別に集計した。

この表によると幼児理解・信頼関係が7月に多く環境構成や直接的援助が4月に多い。このような結果から注視内容を解決するために4項目別に取り上げた考察の結果は次のようである。

(1) 幼児理解

幼児の要求などは表面的に受容しているが、個々の幼児の内面の心情理解に欠けている。ここで、これまでの幼児理解11年間の成果を生かし、日々幼児と共にあって幼児研究に努力を重ねなければならない。

(2) 信頼関係

幼児の興味、要求、必要に対しての対応不足はもとより保育母の一方的な対応などが多い。愛情豊かで思慮深い保育母との活動を通して情緒を安定させ信頼関係を築くような配慮が必要である。

(3) 環境

幼児理解によりその信頼関係を基に個々の幼児の発達に即した保育のねらいによる環境構成を必要とする。なお、環境は幼児と共に生きて日々成長するものでなくてはならない。

(4) 直接的援助

個々の幼児が安心して生活ができ、また発達に応じた適切な援助が与えられるよう日々の幼児理解や信頼関係を深め保育のねらいを明確にする。それに応じた環境構成の中で保育母は幼児と心を通わせながら共に生活を楽しみ個々の幼児の心身の状態をよく把握し発達の援助を行うように努力する。

以上、保育上の注視内容を幼児理解・信頼関係・環境・援助の4項目に分析することにより、その解決の方向が次第に明らかになった。

III まとめと考察

以上、保育する自らの保育上の注視内容を自ら捉えるための共同研究を進めてきた。

自由遊びの記録の流れ図に、そして文章表現による相互関係表にして、それぞれから保育上の注視内容を抽出するための継続研究には、度々困難な問題にも直面した。

自らの保育を分析して保育上の注視内容を明らかにする段階で期待したことは注視内容の減少であった。しかし、(表3)で見るように4月より7月の注視内容の数値が高くなっている。これは分析内容が表面的なものでなく心情面までの深まりを見るような結果と考えられる。

その保育上の注視内容の解決に当たって保育母は幼児の側にたち、全幼児一人一人と心を通わせ、共に生活を楽しみながら全幼児の主体的活動を認め、幼児と共に考え、願い、想いなどを表現させる資質や能力を身につけるように努力してきた。それは援助の各項目はもとより幼児理解、信頼関係、環境などに見られる具体的な注視内容を日々反省考察しながら保育のあり方を求め続けなければならない。

ここに幼児の心情・意欲・態度がおのずから育ち、道が次第に開かれてくるものと考えられる。

保育上の注視内容の項目別分類表 (一部抽出)

(表4)

幼児理解	信頼関係	環境構成	直接的援助
・「虫の卵は砂の中でおおきくなるよ」と言ってきたことに対して「ふーん、そうなの」とだけ言う。 ・「先生は賢いのよ」と言う。これに対して「そうなの」と言う。 ・「だんご虫が卵から産まれた」と感動を伝えてきた。「へー生まれたん」とだけ言う。	・「だんご虫のたまご、こんなに小さい卵から生まれたの」と伝えてきたことに対して、「卵は何色なの」と聞く。 ・「蟻とお友達なの」と言ってきたことに対して「だんご虫と蟻が友達なのね」と勝手に決めて言う。	・虫を見つけて、良く見えるような場所、良く見える飼育箱などの準備に欠ける。 ・自由に見られるような虫の図鑑などの準備不足。 ・虫探しに必要な用具、道具の整備不十分。	・「だんご虫の家知っているよ。ずーっと穴の向うなの」「わーすごいすごい」と言う。 ・(何がすごいのか具体的な言葉で「だんご虫の卵を見せられて「かわいいわね」と言う。(幼児の心情に即応不足)